The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	浅井了意の仏書に見られる民衆教化思想 ： 『浄土三部経鼓吹』を中心にして
Author(s)	楊, 曦
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　楊曦　）	
論文題名	浅井了意の仏書に見られる民衆教化思想 ―『浄土三部経鼓吹』を中心にして―

論文内容の要旨

本論文は浅井了意（生年不明―元禄四[1691]年）の『浄土三部経鼓吹』において、了意の教化思想、教化手段などについて考察したものである。浅井了意は従来仮名草子の作者として有名であるが、浄土真宗の僧としての先行研究が少なく、近年では唱導僧として再評価すべきであるとされるようになってきている。

本論文では、まず、第一章において、『浄土三部経鼓吹』とその構成を紹介し、そして、先行研究の問題点を明らかにする。総じていえば、『浄土三部経鼓吹』というのは浄土宗・浄土真宗の所依である『阿弥陀経』、『無量寿経』、『観無量寿経』、一括して『浄土三部経』とも称される仏教経典を解釈しようとした通俗仏書である。了意の著書に最も大部なもので、寛文八年に『阿弥陀経鼓吹』十八巻が開版されてから、寛文十年に『無量寿経鼓吹』三十巻、そして延宝二年に『観無量寿経鼓吹』三十巻が上梓される迄、満六ケ年を費やしている。しかし、了意の仏書に関する先行研究はまだ極少なく、『浄土三部経鼓吹』を対象とする先行研究は五指に満たない程度である。

『浄土三部経鼓吹』に問答という形式があり、了意は教化対象の疑問を想定して自ら答えるものである。その内容は経典自体に関する疑問のほかに、観想の作法や供養する仕方なども含められている。そして、『浄土三部経鼓吹』に900を超える話があり、その中に日本の話がわずか50話しかなく、その外ほとんど中国の話である。引用典籍から見れば、歴史話や仏教関係の話のほかに、怪談や説話物語もあり、内容は実に豊富である。また、これらの話の引用目的について、用語・漢語の説明のほかに、経典を解釈するために喩え話としても使われている。

第二章では、了意の民衆教化の前提、すなわち仏法と王法との関係、そして、儒、道、仏の三教一致に対する了意の姿勢を取り上げた。まず、了意は王法と仏法とは相応関係であるとし、そして、明主と闇主、悪臣と良臣を論述して、仁政を行い、佞臣をよく見分けるのは明主であり、主君に忠節を働き、主君の過ちを見て諫めるのは良臣であると述べる。そして、仏法と王法に関して、さらに主君の仁、徳などを仏の慈悲と比べ、仏の慈悲こそ万民を救済し、国を災難、疫病などから護ることができるとした。また、王法の法令より、仏法こそ隠れた罪でも露わな罪でも報いがあり、仏法に帰依した人は自然に戒律を守り、犯罪を根本的に解消することができると言い、王法に対して仏法の優れた実用性を論述する。

了意は儒、道、仏の三教一致を主張しながらも、かならずしも道仏と儒仏を同じように扱っているとは言えない。道仏に関して、一致を追求するより、了意は道教の仙人、仙境より仏の神力、往生の不退転を讃嘆し、荘子の無為を「有為」であると批判した。儒仏の一致に関して、了意はまず儒教の五常は仏教の五戒であるという一致を述べ、そして、儒教の仁は婦人の仁であり、仏の慈悲とは比べもできないなどとし、民衆に勧善懲悪を教化する際、儒教より仏教の方がより普遍的、根本的で対応することができると語る。このように、了意の三教一致というのは仏教を中心かつ上位に置いた三教一致であると言えよう。

第三章では、了意の出家者及び在家者に対する教化内容を詳しく分析した。まず、出家者に関して、了意はまず信心がなく、戒律も守らず「無学無信無戒」の僧侶を批判する。そして、檀家に媚を売り、檀家を争うために互いに誹謗する僧侶は「狗比丘」であると言い、不浄説法を行い、聴聞者を悪趣に陥らせた僧侶を「無刀ノ大賊」であると断じる。

了意にとって理想とする僧侶というのは正法を説いて衆生を浄土へ導き、仏法を弘宣する者である。また、了意は仏教の各宗門が互いに誹謗するのは謗法罪を犯したと同様と述べ、妻帯肉食などで批判されることは決して真宗一宗だけの問題ではないと訴えた。とは言え、真宗の他力を立てるために、了意は禅宗の自力修行の欠点を指摘することも見逃せない。

在家者に対する教化に関して、了意は儒教の五常と仏教の世善、すなわち五戒・十善戒の一致を述べて、浄土真宗の立場から世俗生活を規制しようとしていた。その教化対象は庶民だけではなく、権力者となる官吏も対象となり、民に仁慈を与えるべきと述べた。親孝行に関して、世俗の孝行は一世に留まるものに対して、親に仏法を勧め、輪廻から解脱させることこそ「至孝」であると述べた。そして、了意は世俗生活から無常を見出し、妻子や家財などは往生する妨げとなり、在家より出家した方が往生しやすいなどと述べて出世間から教化する意志があることも窺える。

第四章では、了意の勧信の手段について論述した。まず、了意は真宗の一念十念で往生することに対して、疑いをもつ者を批判し、繰り返して信心の重要さを強調する。寿命や親族関係、家財などから無常を見出し、他力信仰への廻心を促そうとした。しかし、貧富の差について了意はただ前世の業因によって決定されるものであると解釈し、現実生活から逃避を促す結果となっている。

了意は他力信仰への廻心を勧めるために、末法時代に入り、自力の修行ではすでに往生し難いことを強調し、真宗の男女・善悪・智愚・平生臨終を問わずに、一念十念で往生する利益を論述した一方で、庶民に平生の修善も行うべきであると、道徳的に生きることを要求する。

そして最後に、こういった考察を通して、『浄土三部経鼓吹』は単なる経典の注釈書ではなく、民衆教化に資する性格をもち、かつ護法的立場をとるものであり、それを上梓した浅井了意もまた単なる唱導僧ではなく、幕藩体制が確立されていく中で当時の社会において仏教のあるべき姿を見出そうとした思想家と再評価すべきことを結論とした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（楊　曦）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	加藤　均
	副 査　教授	嶋本 隆光
	副 査　准教授	柴田 芳成
	副 査　准教授	岩井 茂樹
	副 査　准教授	蔦　清行

論文審査の結果の要旨

浅井了意[生年不明-1691]は、江戸時代前期を代表する仮名草子作家として知られる人物であるが、了意はまた、数多くの仏書を著した浄土真宗の唱導僧でもあった。提出された論文「浅井了意の仏書に見られる民衆教化思想　―『浄土三部経鼓吹』を中心にして―」は、浄土宗・浄土真宗所依の『阿弥陀経』、『無量寿経』、『観無量寿経』の三経典に対する了意の注釈、『浄土三部経鼓吹』[『阿弥陀経鼓吹』(1668)、『無量寿経鼓吹』(1670)、『観無量寿経鼓吹』(1672)の総称]に焦点をあて、その教化思想の一端を明らかにしようとする研究である。当時としては他に類書のない、唱導僧、了意の主著たるべき三書全七十八巻に及ぶ大著である。

本論文では、第一章「『浄土三部経鼓吹』と先行研究」で、まず『浄土三部経鼓吹』の内容構成に触れ、ここでは了意が常に接していたと思われる在家者からの想定されうる疑問に対して、中国の古典を中心に様々な典籍からの話を引きつつ応答する形式を取っており、引用された話の数は九百以上に及び、学僧による教理的な注釈書とはかなり性格が異なることを事例をもって明らかにする。その上で、これまで仮名草子作家としての了意に研究者の関心が集中したため、その仏書への注目度自体が低く、また、特に『浄土三部経鼓吹』は引かれた話が多様で論点が見えにくくなっていることもあり、そこから了意の教化に関する考え方を捉えようとする試みも極めて少なかったと指摘する。

続く第二章「了意の民衆教化の前提」では、筆者は『浄土三部経鼓吹』における所引の話を整理することによって見えてきた民衆教化の前提となる、王法と仏法との関係、並びに儒、道、仏の三教一致に対する了意の姿勢を取り上げる。まず、王法と仏法に関しては、了意は仏法には民衆を導いて教化し、国を安定させる働きがあり、また、王法には仏法を弘宣する機能があると相補的に捉えているが、隠れた罪を裁けない王法には限界があり、すべての悪業に対して報いがあるとする仏法の優れた実用性を強調しているとする。また、三教一致については、道教の自然、無為は涅槃の異称であるとするが、仙人、仙境と比較しながら仏の願力、往生不退転を讃嘆し、また儒教の五常と仏教の五戒・十善戒との一致を説く一方で仏の慈悲の普遍性を語るなど、排仏論に対抗する形で儒教、道教を批判的に取り入れ、仏教を中心にかつ上位に置く複合的な体系を作り上げようとしたことが窺えると筆者は主張する。

その上で第三章「了意の民衆教化の特徴的内容」では、『浄土三部経鼓吹』の全体を通じて現れる「無学無信無戒」の僧に対する了意の厳しい批判は、堕落した僧侶を目にした民衆の仏教への信頼を回復させるようとするものであり、また、儒教の五常と仏教の五戒・十善戒の一致等を強調することによって、仏教、特に真宗の弱点であった世俗における倫理性を儒教倫理により補強しようとしているとする。

また、第四章「了意の民衆教化における『勧信』の手段」では、真宗の唱導僧である了意はもちろん、一念十念の往生に疑いをもつ者を批判し、繰り返し信心の重要さを語り、他力念仏の易行を勧めるが、その一方で、善悪に必ず報いがあり、少善でも捨てるべからずと平生での修善を求めていると指摘する。

そして最後に、筆者はこういった考察を通して、幕藩体制が確立されていく中で当時の社会において仏教のあるべき姿を模索した一人の思想家として了意を再評価すべきであると結論づける。

仮名草子作家としての浅井了意は、近世文学研究の分野ではかなり重要視され、その文学的才能についても高い評価を得ているが、その反面、了意が著した仏書は「通俗仏書」として扱われ、思想研究の場では注目を集めてこなかった。しかし、了意は「王法則仏法」に基づく「職分仏行説」を提唱した鈴木正三の著作について、いくつかの改作を試みた人物であり、また、正三の理論的排耶書と言われる『破切支丹』に対しての注釈を残すなど、キリスト教への対抗意識をもった、当時としては稀有な唱導僧であったことを忘れてはならない。それゆえに、近世における在家

仏教の展開を考える上で、了意の著作とされる十七部に及ぶ仏書の詳細な研究が待たれるところであるが、筆者が了意の主著たるべき『浄土三部経鼓吹』に着目し、その教化思想を明らかにしようとしたのは卓見である。無論、『浄土三部経鼓吹』は、あくまでも浄土三部経の注釈という形態をとるため論点が拡散しており、そこに数々の典籍から引かれた話が付加されることから内容構成が複雑になり、まとまった思想というものを直接取りだそうとするにはかなりの困難が伴う。そこで筆者は九百以上の所引の話を分類することでその内容的な重複度によって了意の強調点を把握し、それらの点を整理し考察した結果、民衆に信心による念仏往生を説きつつも儒教倫理の援用によって世俗の生活における修善を求める、ややもすれば二律背反した了意の教化に対する姿勢を描き出す。この点は評価に値する成果である。

ただし、分類の過程が十分に明かされておらず、論点選択に当たっての筆者の恣意性が完全に排除できないところは残念であるが、直接の先行研究が少ない状況を考えれば、論文そのものの学術的価値を大きく損なうものではないと判断するところである。

以上、審査したところにより、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士の学位（日本語・日本文化）にふさわしいものであるという結論に至った。